様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３７３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１３４５６

研究課題名（和文）ジェンダー／セクシュアリティ研究における分析枠組みの再構築ー精神分析の視点から

研究課題名（英文）Towards a New Conceptual Framework for Gender & Sexuality Studies: A Psychoanalytic Perspective

研究代表者
古川　直子（Furukawa, Naoko）

長崎総合科学大学・共通教育部門・講師

研究者番号：５０８０３８４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　近年のジェンダー／セクシュアリティ研究における構築主義的アプローチは、ジェンダーとセクシュアリティをセックスという「自然」からラディカルに離床させたとされる。しかし実際のところ、この課題が真に実現されたとは言いがたい。それは「雌雄（男女）の別のあること」と「性的な欲望や快」というセクシュアリティというタームの二つの語義が、いまだ不可分に結びついているためである。このセクシュアリティ概念によって、本質主義と異性愛主義への批判はきわめて不完全なものとなる。本研究では現在のジェンダー／セクシュアリティ論における分析枠組みを精査し、S・フロイトの精神分析によってその困難の乗り越えをはかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ジェンダー／セクシュアリティ研究は現在、多岐にわたる学問領域へと影響力を広げつつある。その波及力はアカデミズム内にとどまらない。ジェンダー／セクシュアリティは社会的にも高い関心を集めつつある、ホットなイシューである。しかし、現在のジェンダー／セクシュアリティ研究においては、その影響力に見合った十分な理論構築がなされているとは言いがたい。本研究は当該領域における概念枠組みを再構築することで、今後のジェンダー／セクシュアリティ研究の土台を築くとともに、ダイバーシティやジェンダー平等といった重要な社会的テーマに対して積極的に寄与しうるものである。

研究成果の概要（英文）：The constructivist approach in recent gender and sexuality studies is said to have radically decoupled gender and sexuality from "natural" sex. However, it is difficult to claim that this goal has been fully achieved. For the two meanings of the term "sexuality," "the distinction between male and female" and "sexual desire and pleasure," remain inextricably linked. As a result, critiques of essentialism and heterosexism remain fundamentally inadequate. This study examines the dominant analytical frameworks in gender and sexuality theory and seeks to overcome these shortcomings through S. Freud's psychoanalytic approach.

研究分野：社会学

キーワード：ジェンダー　セクシュアリティ　精神分析　フロイト　性別二元論　異性愛主義　本質主義　フェミニズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

性的マイノリティやフェミニズムというテーマについて、近年かつてないほど急速に社会的な関心が高まりつつある。教育や医療、行政といったあらゆる分野で、性にまつわる差別の解消に向けた制度改革や意識啓発が精力的に進められている。その一方で、ジェンダー／セクシュアリティ研究の概念的枠組みをめぐる理論的な作業は、長らく停滞を迎えている。80 年代以降のジェンダー・セクシュアリティ研究において導入された社会構築主義的アプローチは、セックスとジェンダーの区分そのものを問い直した。「生物学的で自然な違い」とされるセックスもまた、ひとつの社会的なカテゴリーであるという洞察が提起されたのである。生物学的な性的二型を基盤として、そのうえにジェンダーという社会的性別が築かれるのではない。人びとを男女という相互に排他的な二つのカテゴリーへと分類しようとする動機のもとで、セックスという二項対立的区分が見いだされるのである。性別の二元性が自然に属するというより、むしろ際立って社会的な制度であるという洞察は、異性愛という「自然」にも適用される。「強制的異性愛」（A・リッチ）や「ヘテロノーマティヴィティ（異性愛規範）」といった着眼は、社会経済的な制度としての異性愛主義の存在を暴き出したのであった。こうしてジェンダーとセクシュアリティは、セックスという「自然」からの離床を果たし終えた。実践的な課題は多く残るものの、ここが現在のジェンダー／セクシュアリティ研究の到達点であるとされる。しかし、異性愛主義や本質主義は本当に理論的に乗り越えられたと言えるのだろうか。これが本研究の出発点となった問いである。

２．研究の目的

現在のジェンダー／セクシュアリティ研究においては、理論的枠組みの精査が十分になされておらず、概念レベルでの混乱が生じている。本研究では現在の当該領域における分析枠組みの問題を指摘したうえで、フロイトの精神分析におけるセクシュアリティ論の意義を検討した。

３．研究の方法

本研究ではポスト構造主義フェミニズムを中心とする近年のジェンダー／セクシュアリティ理論を批判的に分析した。さらに、独仏語圏におけるフロイト研究を参照しながら、異性愛主義や本質主義の乗り越えを可能にする思想としての精神分析の意義を検討した。

４．研究成果

かつてセクシュアリティという語は「無定義概念」とされ、その曖昧さがジェンダー／セクシュアリティ理論の展開の桎梏となっていた。この語は最近になって、さらなる問題を引き起こしつつある。近年、セクシュアリティはセックスとジェンダーの両方をふくむ「性の総体」をさす語として説明されはじめている。それはセックスとジェンダーの両方をふくむ「全体としての性」という、この語のかつての理解への回帰である。この立場によると、「性の総体」としてのセクシュアリティは「身体の性別」「性自認」「性表現」「性的指向」の４つの要素に分割されうる。このモデルは近年、行政や教育、医療の場面で広く用いられている。これを主導してきたのは、社会学も含めたアカデミズムの側である。しかし、このモデルは実のところ、ジェンダー／セクシュアリティ研究の根本的な洞察を抹消することによって成り立っている。この点についての本格的な学問的検討を経ることなく、当該モデルは定説として根づいてしまったのである。

本研究では、この観点から現在のジェンダー／セクシュアリティ研究が直面している理論的困難を精査し、分析の基本となる概念枠組みを根本から立て直すことを試みた。70 年代に導入されたセックス／ジェンダーの区分において、ジェンダーは可変的であり、セックスは不変であるとされていた。しかし、80 年代になると、セックスもジェンダーと同じく可変的な社会的構築物であるとされるようになった。この主張は、セックスをめぐる認識が社会的文脈によって根本的に規定されているという点においては正しい。しかし、この提起はポスト構造主義フェミニズムにおいて、セックスそのものが可変的であるという主張として読み替えられてゆく。そして、セックスを通文化的な生物学的事実と見なすこと自体が本質主義として批判されるようになるのである。

また、70 年代に第二波フェミニズムにおいてセックス／ジェンダーという区分が導入された当初、ジェンダーとは人びとを特定の役割へと押しこめる型であり、規範であった。これを「規範としてのジェンダー」理解と呼ぶなら、近年これとはまったく逆の理解が影響力を持ちつつある。近年の議論が目標とするのは、個々人が「自分のジェンダーを自由に生きられる」社会である。ジェンダーはここにおいて、「性表現」や「性自認」といった用語のもとで、多様な個性の表現となる。ここでのジェンダーとはもはや規範や役割ではない。それはむしろ、規範に抗って

生きられるべき自己表現である。つまり、ジェンダーという語の内容が、かつての語義（規範）から規範に抗って生きられるべき個性へと反転しているのである。この新たな傾向は、ポスト構造主義フェミニズムの代表的著作（Butler 1990）によってもたらされたものである。

こういった理論的混乱によって、現在の当該領域においては議論の前提となる基本的な事実が見通しづらくなっている。それは、性別が生物学的特徴にもとづく社会集団であるという点である。その結果として、かつてセックス／ジェンダーの区分に賭けられていた洞察のほとんどを継承することができなくなってしまったのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 古川直子	４．巻 34
２．論文標題 「セックス」はフィクションか？―J・バトラーとフランス唯物論フェミニズム	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日仏社会学会年報	６．最初と最後の頁 34-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 古川直子	４．巻 26
２．論文標題 「セックスもまたジェンダーである」のかーポスト構造主義フェミニズムにおけるジェンダー概念再考に向けて	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ジェンダー研究	６．最初と最後の頁 27-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 古川直子	４．巻 68-3
２．論文標題 S・フロイトの精神分析における外傷理論の再検討――初期誘惑理論から後期欲動論へと引き継がれたもの	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ソシオロジ	６．最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 古川直子	４．巻 26
２．論文標題 バトラーはボーヴォワールをいかに誤読したかーー「規範としてのジェンダー」と「自由としてのジェンダー」	５．発行年 2024年
３．雑誌名 社会文化研究	６．最初と最後の頁 139-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関